

<書評>

ロンダ・シービンガー著 小川眞里子、弓削尚子訳

『植物と帝国―抹殺された中絶薬とジェンダー―』

(工作舎 2007年 394頁 ISBN 978-4875024019 3,990円)

森 義仁



本著作は、ジェンダーの視点を持って知識の断片群を再構築することにより、隠れた知識が顕在化されることを示したものであり、その流れるようなシナリオ展開に、読む者は休憩することを忘れてしまうであろう。最初に、本著作を読んだ後、著作タイトルについて改めて思うことを述べてみたい。本のタイトルというものは、その全内容の大きさに比べてはるかに短い。本著作「帝国と植物」は、全394ページの決して小さくはない作品にも関わらず、そのタイトルは「帝国」と「植物」のたった2つの単語からなる。それだけに、読む者は、そこに著者の思考のエッセンスが詰まっているのではと思う。

「帝国」。時は18世紀、ヨーロッパ列強諸国が選択した政策は重商主義であった。それは、産業革命確立前の資本蓄積の時代、貿易が目指すものは金銀の獲得ではなく、貿易黒字であることを強く推し進めるものであった。18世紀に最盛を迎える大西洋三角貿易において、ヨーロッパ諸国は、自国から運んできた銃や酒をアフリカ西部で黒人奴隷と交換し、南北アメリカの植民地でその黒人奴隷を砂糖やコーヒーと交換し、ヨーロッパに運んで富をなす。そのような一つのビジネスモデルが18世紀にあった。本著作は、南北アメリカの植民地からヨーロッパへの輸送に着目したものである。そこでの貿易品はどれも高価なものである。そこには運ばれるものとしての採用基準がある。一方、南北アメリカの植民地からヨーロッパに運ばれなかったものもあるはずである。その不採択基準は利益率が低いからだけだったのか。いや、そうではなく、重商主義に潜む不採択基準があるのである。この不採択基準、そしてその基準を決定した者が、本著作のタイトルに含まれる「帝国」を意味するのであろう。

一方の「植物」。運ばれるもの必ずしも実体がないといけないというものでもない。それが情報でもよいわけである。著者は南北アメリカの植民地からヨーロッパへの輸送に関して、一つの植物に着目する。オウコチョウ（黄胡蝶）、英語名はピーコック・フラワー、学名はポインキアーナ・プルケリッマ。これは南北アメリカの植民地では、中絶薬として使われていた。しかし、オウコチョウ自体はヨーロッパに運ばれたにも関わらず、その中絶薬としての使用法はなぜか伝わっていなかった。「植物」は、この運ばれなかったことの事実を表現しているのであろう。

そして、伝わらなかった事実の様相を、ジェンダーの視点に立って考察することにより、重商主義に潜む不採択基準を成立させるメカニズムを見出すのであり、本著作タイトルは、「帝国」と「植物」の化学反応であると表現できるのではないかと思う。

次に、著作の全体の流れについて紹介したい。本著作は序論と1～5章、及び結論の7つから構成される。1～5章と結論には、それぞれにタイトルが与えられ、章のはじまりに文章が引用されている。そこで、そのタイトルと引用文章を示し全体の紹介をする。著作タイトルと同様に各章のタイトルと引用文章には、著者が伝えたい各章のエッセンスが含まれているように思うからである。

第1章のタイトルは、「出航」。短くはない本著作のはじまりを表現しているとともに、問題となる18世紀に向けて、時間を遡るタイムスリップの旅のはじまりに加え、その現場となった南北アメリカの植民地へ空間移動することを予感させるものである。本章の材料は、18世紀後半に出版された南北アメリカ植民地に関する文献であり、それらは、本著作全参考文献約250編のうちの約25%に相当する。この章では、「サン・ドマングでは砂糖、綿花、インディゴ、コーヒー、カカオが豊富に産出するので、黄金と幸運を手に入れたという野望を十分に満たしてくれる(アルトー 1787)」が引用されている。南北アメリカの植民地からヨーロッパに運ばれた砂糖は上流階級の食卓上を飾る砂糖漬けのお菓子にも使われ、コーヒーは社交の時間に欠かせない。インディゴは艶やかな服飾に不可欠な染料であり、いずれも黄金に匹敵する価値を持っていたのである。これらの価値あるものをヨーロッパに持ち帰ることにより、国家に富の蓄積をもたらし、次いで現れる産業革命の準備が整うのである。

第2章のタイトルは、「植物探索」。引用される文章は、「われわれが特効薬に関する知識を持っているのは、まったくの偶然によってか、野蛮な民族が得たものにすぎない。内科医たちの科学のおかげではないのだ(モーペルテュイ 1752)」である。第2章では、専門家による現地での黄金に匹敵する植物の探索記録が紹介されている。ヨーロッパの人間にとって未開の土地である南北アメリカでの植物探索は危険な冒険であり、偶然の発見か、再発見に頼る、ハイリスク・ハイリターンの仕事と言えよう。

第3章のタイトルは、「エキゾチックな中絶薬」。ここでは、「果実を収穫しようと見てみると、われわれの果樹園では必ずと言っていいほどサビナの木以外何も見つけることができない。この木はむしろ果実(胎児)を台無しにするために、手当たりしだいに植えられていた(ミドルトン 1624)」、「悲惨な運命にある者たちが子どもを持ちたいという自然な欲望を失っている。あらゆる本能に背いて母親たちは残虐な仕打ちから守ろうとして、自分の子どもを殺しているのだ。不幸な奴隷は自然の叫びではなく、抑圧への憎しみに耳を傾けているのだ(匿名1785)」が引用されている。「出航」、そして「植物探索」に続いて、この章では、本著作最大の関心事である、現地で中絶薬として使われていたオウコチョウが登場するのである。中絶薬の使用者は黒人女性奴隷自身である。過酷な労働環境は、子孫への不幸の連鎖切断を決断させ、一方で、労働力を必要とする、主である白人への抵抗手段でもあったのである。

第4章のタイトルは、「ヨーロッパにおけるオウコチョウの運命」。ここでは、「数年前、エディンバラ大学で……われわれのうち数名がさまざまな薬の実験を行うために仲間を作った(トムソン1820)」が引用される。貿易によって得られる植物の薬用作用は、男性だけでなく女性においてもその薬効の実験が行われていたにも関わらず、オウコチョウの中絶薬としての実験は行われなかったのもとともに、国家により編纂される薬物集「薬局方」への記述もされなかったのである。

第5章のタイトルは、「命名に発揮された帝国主義」。引用された文章は、「私は古代ギリシア人やローマ人が植物に授けた名称を推奨するが、現代の専門家が名づけたものを見るとゾッとしてしまう。というのも、その大部分が困惑の果てに命令された混沌たるものに過ぎないからだ。野蛮という母親と独裁主義という父親のもとに生まれた偏見という乳母に育てられた代物ばかりだ（リンネ 1937）」である。タイトルに示された帝国主義的命名法の創始者こそ、ここで引用された文章を書いた本人、リンネである。リンネの考案した命名法は、二名式命名法と呼ばれ、ラテン語の属と種の名前で構成される。現在でも使用されている学名というものだ。リンネ以前の名前は、現地の言葉を使い、その植物の繁殖の土地由来であるとか、その効能由来であるとかという総合的な表現であった。リンネはその総合の冗長性を攻撃しているのである。一方、二名式は分析的であり、当時のヨーロッパ科学界において、物事を分析的に考えることは正しい姿勢だと認識されていたからだ。このリンネの姿勢は、化学における化合物命名法を考案するラボアジエに受け継がれたと言われている。しかし、二名式では、その名前を、男性支配層の人名から取る傾向があった。たとえば、オウコチョウの学名の属名である、ポインキアーナは、総督ポアンシーに由来しており、ご機嫌を取ったわけである。ラテン語の主な使用者が男性であることを考えると、このような命名法は、分かる人だけに分かる方法なのである。このような判断基準を持つ男性専門家集団の手によるオウコチョウの運命の予想は難しいものではないだろう。

結論のタイトルは、「アグノトロジー」。アグノトロジーは、「ある文化的文脈の中で抹殺された知識を研究すること」と紹介されている。その効能が伝達されなかったオウコチョウに関わる出来事を、アグノトロジーを持ってきて考察を行うと次のようなことが見えてくるのである。人口は国家の発展に密接な関係がある。産業や軍、いずれにしても労働力は不可欠である。国家を運営する男性は、国家の発展に重要な人口増加に対して自らが管理者となることを望むのであって、決して、女性自身が中絶薬を持つことにより、人口管理者となることを望まないものである。この引き出された結論を読むとき、この章のはじめに引用される文章、「人口が多いと、植民地は強く豊かになる。人口が乏しく減少するようでは、貧困と無気力につながる（ダジュール 1776）」、「古代からの中絶は.....過剰人口を抑制するためのよく知られた方法だった、しかし、個々人の命が国家にとって重要になると、国民の命を守ることが国家の最も重要な義務となる（グェトナー 1845）」がより味わい深く思える。

最後に、本著作が広く読者に与えるであろう影響について考えたい。現在ではジェンダー問題の専門家でなくとも「ジェンダーの視点」というフレーズをよく目にする。「ジェンダーの視点」に関する解説が内閣府男女共同参画基本計画第二部の2に現れる。ではそもそもジェンダーの視点に原理的な定義はあるのか？誤解も多々あるだろう。本著作の考察を読む時、ジェンダー問題の専門家でなくとも、たとえば、薬学、広くは科学・技術の専門家にも、ジェンダーの視点とは何かについてその糸口を得ることができるのではないかという期待を感じる。

（もり・よしひと／お茶の水女子大学理学部化学科准教授）